

## 序 文

一八八七（明治二〇）年九月一六日、弱冠二九歳の哲学者・井上円了によって開設された哲学館は、臨濟宗妙心寺派麟祥院の一室を仮の教場とし、定員わずか五〇名の私学ではあったが、明確な教育理念にもとづくものであった。

それは「第一ニ晩学ニシテ速成ヲ求ムル者、第二ニ貧困ニシテ大学ニ入ルコト能ハザル者、第三ニ原書ニ通ゼズシテ洋語ヲ解セザル者ニ哲学諸科ヲ教授スル為」（「哲学館開館旨趣」と、学祖・井上円了みずからによって述べられているように、学問を象牙の塔に閉じ込めることなく、万民に開こうとする大学開放の姿勢である。大学と社会とのあいだにある垣根を取り払い、すべての人々が学問する機会を与えられるべきであるという生涯学習の構想は、現在、ようやく国の教育政策の中心とされるようになったが、哲学館においては開館当初から同趣旨の理念が掲げられていたのである。

また、日本が近代国家として生まれ変わって二〇年、ヨーロッパ諸強国に追いつこうとして国をあげて富国強兵・殖産興業へと向うなかにあつて、「一国ガ万国ノ間ニ独立スルヲ得ルハ、畜ニ富国強兵ナルガ故ノミニアラズ。思想ノ独立、学芸ノ進歩、最其主要ナル原因ナラスンバアル可ラズ」（哲学研究会々則、緒言）として、哲学教育による人間そのものの啓発こそ国家の基礎を築くものと主張し、「哲学」を哲学館の教育理念の根本としたことにも、時代を超えた普遍性を求める学祖の態度が感得される。このほか、哲学館教育においては東西思想の交流、学生と教授との対話の重

視、とび級の制度など、百年後の現在を先取りした教育が多々おこなわれていたことに思いを致すべきであろう。

創立以来百余年を経た現在、哲学館は文・経済・経営・法・社・工の六学部、短大、大学院、通信教育課程、および二つの附属高校をもつ総合大学・東洋大学となったが、学祖・井上円了が主張した哲学の精神はとだえることなく受け継がれて来たということができよう。私立大学にとって、建学の精神は生命ともいうべきものであり、私立大学はいわば建学の精神に支えられた有機体である。しかし、有機体であるからこそ、不断に養分を与えて活性化することが必要であり、東洋大学百年の歴史を編むことは、その努力がいかにおこなわれたか、あるいは何が欠けていたかを、東洋大学にかかわるすべての人々があるまに見、新たな世紀の東洋大学を創造する手がかりをつかむためである。

東洋大学のルネッサンスは、いま、始まったばかりである。東洋大学百年史が新たな東洋大学構築に役立つものとなることを祈念して序に代えたい。

一九九三年九月

東洋大学学長 菅 沼 晃